

こんにちは 家畜保健衛生所です

家保便り

平成 28 年 6 月

牛ウイルス性下痢・粘膜病（BVD・MD）の対策をしましょう

どんな病気か

BVD ウイルスの感染により、発熱、下痢、呼吸器症状などを引き起こします。一般的に軽症で済むことが多いですが、致死的な粘膜病を発症することもあります。また、妊娠牛が感染すると異常産や持続感染牛（PI 牛）の原因となります。

近年、全国的に増加傾向にあり、新たにガイドラインが策定されました。

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
発生頭数 (全国)	228	189	228	259	310

持続感染牛（PI 牛）について

妊娠牛（胎齢約 18～125 日）が感染すると、その胎子は PI 牛として生まれることがあります。PI 牛は、生涯に渡ってウイルスを保持し、鼻汁、糞尿、乳汁などにウイルスを排出し続けます。PI 牛は、一見健康に見える場合でもウイルスを排出しており、感染源になります。

また、PI 牛は致死的な粘膜病を発症する危険性が高いです。

PI 牛摘発のための検査

スクリーニング検査：農場の清浄性を確認する検査です。バルク乳や血清を用いて集団検査を行います。感染牛の特定はできませんが、PI 牛を見逃さないよう定期的な実施をお勧めします。

個別の検査：個別に検査を行い、PI 牛を特定します。主に血液を用います。導入牛、新生子牛、本病の疑いがある牛などを対象にします。

対策

1. 摘発・淘汰

PI牛に対する効果的な治療法はありません。早期に発見し淘汰することが重要です。本病を疑う場合、速やかな検査の実施を心掛けましょう。

2. 農場へのウイルス侵入防止

導入牛（妊娠牛の場合はその子牛も）については、導入時検査や隔離を行うことでウイルスの侵入を予防します。

3. ワクチンの接種

感染予防のためワクチン接種が推奨されます。妊娠牛に生ワクチンは使用できませんので注意してください。

《家畜保健衛生所で取扱っているワクチンのご紹介》

牛呼吸器病 5種混合生ワクチン ・ 牛呼吸器病 6種混合生ワクチン

主に子牛に使用されていますが、繁殖牛への接種も有効です。1年1回の接種が推奨されます。両方とも生ワクチンであるため、妊娠牛や3週間以内に種付け予定の牛には使えません。

	5種混合	6種混合
対象	牛伝染性鼻気管炎ウイルス 牛パラインフルエンザウイルス 牛RSウイルス 牛アデノウイルス(7型) BVDウイルス1型	牛伝染性鼻気管炎ウイルス 牛パラインフルエンザウイルス 牛RSウイルス 牛アデノウイルス(7型) BVDウイルス1型 BVDウイルス2型
手数料	1800円/頭	2400円/頭

← 対象範囲が広い

予防対策や検査などご不明な点は、家畜保健衛生所へご相談ください。

家畜保健衛生所業務第一課	0743-59-1700
家畜保健衛生所業務第二課	0745-62-2440